松の木のある家

森　明子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
松の木のある家

【Ｎコード】
Ｎ９７６８Ｃ

【作者名】
森　明子

【あらすじ】
高校生の話。純愛物？達也の１７才からお話です。

松の木のある家（前書き）

多少のＢＬ、性表現有り。

松の木のある家

白く続く壁からのぞく松の木の枝　かつて
通い慣れた道　無意識の内に足が止まる
いつもの様にインターフォンを押す
「こんにちわ」「はぁーい、今開けます」
小さなため息と共にまたかという気配を伴って
扉が開けられる

開けられたままの玄関からのびる階段を
いつもの様に君の部屋へと上がって行く
キレイに整頓され掃除も欠かさない部屋に
温かさを持つ人の気配は無い
いつもの様に壁には制服が掛かっている
君が起きて何時学校へ行ってもいい様に
もう１０年前の話じゃないか…
いつもの様におばさんはお茶を持って来てくれて
「後、２週間で引っ越すのよ。どうする？」
ポツリと聞いた　「何か、持ってく？」
制服？少し欲しい気はするけど貰ってどうする…
もう、此処へは来れないのか　来る必要は無いのか…
いつもの様におばさんは僕を一人残し階下へ消える

開け放たれた窓の薄いカーテンが揺れ
心地良い風が遠い記憶の想いを呼び覚ます
いつもの様に彼女が使っていたベッドに
ゴロンと横になる
洗濯してある筈なのに若い彼女の臭いがする
愛しくなり眼を閉じると一気に記憶は

現実と成り１０年前に戻る

Ｓａｒａ（幸）と達也

高校１年の２学期
インターナショナルスクールから転校した
最初は同じクラスでは無かった
出逢ったのは放課後の帰国子女対象の補習クラスだった
彼女は中学２年の時帰国していて既に３年程経っていたが
日本に住むつもりが無かったのか現地で日本語学校にも
通っていなかった
ロスで生まれ育ち父親はアメリカ人なので
家でも４才年下の弟と父親には英語
母親だけには日本語という風だったので
話す事には不自由しなくても読み書き漢字は
高校１年になっても大変そうだった
俺は日本生まれだし親も日本人だし
小学校３年から行ったシンガポールでも
日本人学校へ行っていたし
６年生からのＮＹでも現地補習校で一応受験に備えていた
夏休みの度におばあちゃんちに１人預けられてたので
帰国したばかりの時も電車やバスに乗るのも
不自由しなかった
補習クラスは５人程で学年もバラバラ滞在期間も
国も就学能力もバラバラだった
ブラジル日系　アジア系　中高一貫なので兄弟もいた
実は俺は日本語は大丈夫だったが数学が遅れてたんだ

２年になり彼女と同じクラスになった
古文の授業は隣に座らされ２人は先生からも外人扱い

皆に『さっちゃん』と呼ばれる彼女は
出逢った当時はパンパンだった顔もハーフらしい
彫りの深さと１６５ｃｍ以上の背になり大人びていた
（帰国した頃は体型もパンパンだったんだぜ）
中学から一緒の奴が写真まで見せてくれた
悪いが大笑いしてしまった

横で先生の読む源氏物語を遠ーい眼をして
外国語の様に聞いている彼女と居る事は嫌じゃなかった
心地良かった　何故か癒された　時々　何重にも有る
言葉の意味や古いしきたり　考え方等を英語で説明する
「昔の日本の女の人ってガマンしてたんだねぇ～」
…好きだから身を引く…ひたすら待つ…
迷惑がかかると自分の感情を押し殺す
そんな部分
このアメリカンなお嬢ちゃんにもあるのかなぁ
少し興味を持ち始めていた
気が付けば補習帰りは必ず家の前まで送って行き
食堂ではさり気なく彼女の為に椅子を引く俺
ハグしたり２人の周りだけアメリカンな感じだった

ある日彼女は学校を休んだ
「仕事じゃないの？」「仕事してるの？」
「モデルだよ」女子がファッション雑誌を開けて見せる
そこにはにはますますほっそりとして大人びた
『さっちゃん』が『ブリジッタ』と言う名前で載っていた
彼女の本名は　Ｓａｒａ　Ｂｒｉｇｉｔｔａ　Ｏ、Ｃｏｎｎｅｒ
古文のノート持って行ってやろう

補習と部活で何時もよりは遅い時間に

彼女の家のインタフォンを始めて押した
表札には小林
自分にはおよそ似つかない『小林　幸』と言う日本名を
さっちゃんはいたく気に入っていた
まるで来るのが判っていたかの様に扉を開けに来た
彼女は「上がれば…？」と言って２階へと
振り返りも返事も聞かずに先に行く　デレ～っとした
グレーのスエットの上下の背中にはＤｏｇｅｒｓ
（オイオイ…　俺はやっぱりヤンキース）
玄関には異様に大きなバスケシューズ　誰のだ？

階段を上がり彼女の部屋に一歩入り来た事を後悔した
「今日一緒だったんだ」「送って来て遊びに来た」
「ノラだよ」…知ってるよ「ｏｈ！　タツじゃない」
嬉しそうにハグまでして来ようとする　すんな！
誰のせいで転校したと思ってんの？
俺はかすり傷にしろお前に刺されたんだぞ

「あれ～　知ってるの？」知ってるよコイツの事は
インターナショナルスクールで一緒だった
実はシンガポールの学校でもちっちゃい時一緒だった
その時から気に喰わなくてケンカばっかしてたんだ
大っ嫌いなノラに帰国早々又出会って　あまりに
デカくなってたんでビビったけど
日本のインターナショナルスクールはいわば
日本国籍でない子の集まり　大使館の息子も居れば
香港マフィアの息子も居る　ノラの父親は日本人
母親は東南アジア系　スクールでは日本人は少数派
よほど英語教育に熱心な日本人か
どうしても日本の学校には行けない奴とか

俺の場合は編入が間に合わなくて
ノラの居るスクールになった訳
最初ノラは懐かしそうに近づいて来たけどそれは
彼のグループに誘う為であって
俺の一番近づきたく無い種類の若者の集まりだった
ある日　グループは学校で暴れて　先生を咄嗟に庇って
ノラの振り回したしょぼいナイフが俺の腕をかすめた
オヤジはかんかんに怒って即転校になった

「お前ら付き合ってるの？」
一応聞いてみた　「まさか…」；；
「付き合いたいねー」「ヤダね」
モデルとしてはもうノラも１８０ｃｍあるし
フィリピーノの黒い瞳と長い睫毛　浅黒い肌
エキゾチックっていうの？完璧じゃん
でもコイツ性格と素行は最悪だぞ　多分頭も…

「ノート渡しに来ただけだから　俺帰る…」
「あら　ノラ君のお友達？」「あっ始めまして」
（違います　俺はあくまでさっちゃんのお友達です）
「達也です」
「ああ　貴方が…いつも幸がお世話になってます」
「いえいえ」
“Ｔｈａｔ、ｓ　ｒｉｇｈｔ，　ｈｅ、ｓ　ａｌｗａｙｓ　ｔａｋｅｓ　ｇｏｏｄ　ｃａｒｅ　ｏｆ　ｍｅ”
自分に言い聞かせる様に幸は呟いていた

彼女の家に始めて行き　あのノラが彼女の部屋に居た事が
俺の気持ちを大きく変化させていた
その翌日から俺は学校でもピッタリと彼女に張り付き

幸も寄り添う様に俺の側に居た　帰りも家に上がり込み
自然にいつでもキスしてるような2人になっていた
キスなんてディープでもどうって事ない　俺は
NYでもう彼女居たし　幸もキスぐらい平気って感じで…
でもそこから先はなかなか進まなかった
抱き合ったまま寝てしまってるのを見たおばさんは
制服のままは皺になるから脱いでよねって　変わってる

Ｓａｒａの発病

又学校休んでる　又仕事？
いつもの様にでも今日は補習も部活も無いから
早い時間にノートを持ってく　扉を開けてくれたのは
弟の圭太だった
当然の様に2階へ上がる　ノックもしないで開けると
前ボタンの薄いワンピースのままベッドに寝ていた
どこかへ出かけていたの？…学校休んで
そうっと側へ近づき…ホントに寝てるの？…と
確かめようとして微かに消毒液の臭いに気づく
腕には痣の様な点滴？の跡…
「具合悪かったの？　どしたの？」
「検査…又行くんだって　血取られて　血管注射して　点滴打って
…」
「何　フルコースじゃん　大丈夫？」
「うーん　疲れちゃった　何かダルイ…」
…コンコン小さなノックをして顔を出したのは圭太だった
トレイにジュースなんか持って来てる
「邪魔しないから　これ置いとくね」ませてる…
「おまえ一人？おばさんは？」
「買い物　おばあちゃんは昼寝してる…」
「ふーん　ありがと」

「ねぇ病気？　どっか悪いの？」
「さぁーだから検査なんじゃないの？」
「そっか」
いつもよりそっとそっと口づけた
疲れたの？　又痩せた？　ベッドの端に座り

横たわる彼女の手を取り握りしめ聞いた
“ｓｔｅａｄｙ？”　俺とちゃんと付き合ってよ
“ｓｕｒｅ！…　いいよ

言ってドキドキした　たまらなく愛しくなり
彼女の横へ添う様に横なる　何故か不意に鼻の奥が
つーんとなり　どっかへ行っちゃう
彼女は俺を置いていっちゃう…そう思った

ふわりと被せる様に抱き締め　首筋に顔を埋め
涙目を隠した　時間がない　何故かそう感じ
顔を上げ彼女を見た　真っ直ぐに見つめ合い
彼女は俺の瞳の奥に何かを見つけようと訴えている
“…Ｓａｒａ…”愛しいよ…言葉にはせず
決意の口づけを優しく深く交わした

それからの俺たちはピタッと寄り添い
熟年の夫婦の様に何も言わなくても目配せで会話が出来た
そうして会う毎に少しづつゆっくりと口びると
指の範囲を広げ　服こそ脱がないもの
お互いを見せあい　痕を残し
キスを繰り返しながら彼女の下着の中へ指を滑り込ませる
そしてそこまでだった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9768c/

松の木のある家

2011年1月9日02時22分発行